

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

どんなときもどんな場所でも楽しめる 読書活動の実践報告

横浜市立中村特別支援学校

司書教諭 関戸優紀子

はじめに

本校は、1982年4月に中村養護学校として、中村小学校と併設する形で開校しました。現在では、小学部39名（うち訪問籍5名）、中学部12名（うち訪問籍1名）、高等部22名（うち訪問籍2名）の計73名、そして、横浜医療福祉センター港南の中にある分教室には、12名の児童・生徒が在籍しています。

本校の近くには、横浜市立大学附属病院や地域活動ホームがあります。本校に通う子どもたちの障害の状態は、近年多様化しています。教育課程は自立活動の子どもがほとんどですが、知的代替、準ずる教育を行う子どもも在籍しています。興味・関心の幅を広げたい子どもの他に、言葉の習得を目指す子どもも近年増えてきました。

中村小学校と併設されている本校にとって、学校間の交流は、たいへん重要な教育と考え、積極的に行っています。ドア1枚で学校がつながっている

ので、日常的に自由に学校間の行き来があります。小学生が昼休みに本校の子どもたちにリコーダーの演奏を聞かせてくれたり、本の読み聞かせをしてくれたりすることもあります。運動会や避難訓練などの行事も合同で行います。また、教員間の交流も活発に行っています。交流によって、本校の子どもたちが受ける影響は大きなものがありますが、中村小学校の児童に与える影響は、より大きなものがあります。

活用事例

・分教室 高等部1年男子A

Aさんは、うれしい時や楽しい時は笑顔になり、快の発声をしたり、嫌な時や怒った時は不快そうな表情になり、声を出しながら手足を元気よく動かしたりして表現することができます。

絵本は、繰り返し言葉の多い本を好みます。分教室では、タブレット端末専用のスタンドを使い、手軽にiPadで「わいわい文庫」の本読みを実施しました。

スタンドの用意を教員がすると、期

待感をもった表情でじっと教員を見つめます。いざ本読みが始まると、じっと画面を見たり、時には身体を動かしたりしながら笑顔で見たりしています。

特に『パパンがパン』『ことことことこと』『ケーキ・ケーキ・ケーキ』が始まると大喜びします。活用の時間としては、教員が他の生徒とのかかわりをするための待ち時間に多く使用しています。

・ 中学部 3 年女子 B

実態としては、4 年前より昼休みを中心に、iPad の VOD アプリを使用して「わいわい文庫」の本を読んできました。また、3 年前よりコミュニケーションの能力の育成をねらった学習の教材としても使用しています。

B さんは「わいわい文庫」の本読みが大好きです。特に、目次から教員が本を選び、自分の好きな本が始まると、最高の笑顔を見せたり、声を出して笑ったりします。給食が終わると、早く本読みをしたくて、「ラララ～」と大きな声で周りの人に伝えられるようになりました。

B さんが「ラララ～」と言うと、近くにいる教員が期待感いっぱい B さんの熱い視線を感じながら、iPad を設置しアプリを起動させます。

最初のうちは教員を目で追って訴えていましたが、「わいわい文庫」への

興味・関心の高さを利用し、発声でコミュニケーションをとることができるようになったのです。

そんな B さんがしばらく、今までの発声がなくなったり、やりとりができなくなったりする時期が昨年度ありました。原因の 1 つとしては、昨年度の問題が考えられます。

昨年度は、毎日「わいわい文庫」の読書活動ができなかったことと、B さんが手術を受け長期休みがあったことで、B さんにとって楽しい昼休みの見通しがもてなくなったのだと考えました。

そこで、今年度は担当の先生に協力をお願いして、基本的に毎日読書環境が整うようにしました。B さんは棚にタブレット端末専用のアームホルダーを取り付け、仰臥位の姿勢で自分の見やすい位置に iPad がくるようにしたものや、タブレット端末専用のスタンドを使用し側臥位の姿勢をとるなどの方法で本読みをしています。



お気に入りのフレーズに大喜び

しかし、昨年度は、安全面の理由でこのような方法が取り組めないことがありました。そのことから必ず画面が見られるということにこだわらず、「聞く読書」をBさんに試しました。Bさんは「聞く読書」の受け入れも良かったので、今年度も、聞く読書も本読みの方法のひとつとして担当の先生に引き継ぎました。

4月から毎日のように、昼休みはiPadによる「わいわい文庫」の本読みを行っています。方法はさまざまですが、毎日取り組むことで、Bさんの発声でのやりとりが増えました。そして、いまでは大きな声で誰とでも「ラララ〜!」と言って本読みをしたい要求を伝えられるようになりました。

現在、学習として「わいわい文庫」の使用をして取り組んでいるのは、「視線で選択する」ということです。Bさんの好きな本の表紙の画面を写真カードにし、黒色のカードを並べ、視線で好きなほうを選ぶという学習の教材にしました。

「Bさん、読んでほしいほうを見

て!」という教員の言葉がけで、何度か取り組むとBさんは、黒色のカードを見ると何もなくて、自分が本の表紙の写ったカードを見ると先生が「わいわい文庫」の再生ボタンを押し、本読みができるということを理解しました。そして、いまでは複数の本の表紙のカードから、いま自分が読みたい本を選ぶことができるようになっています。

おわりに

本校での取り組みも今年で4年目になり、今年は新たに分教室での取り組みが行われるようになりました。肢体に不自由があり、重度重複の子どもたちが多く通う本校では、教員との1対1のかかわりを待つ時間も多くなります。

そんなときに、学習や余暇活動の時間として、子どもたちの側にマルチメディアDAISY図書があることは、とても有効なことです。今後、さらに使用者や使用場面を増やすなかで、たくさん子どもたちに気軽に読書活動の習慣をつけられればと願っています。